アスベストの影響考える

子どもへの対策など論議

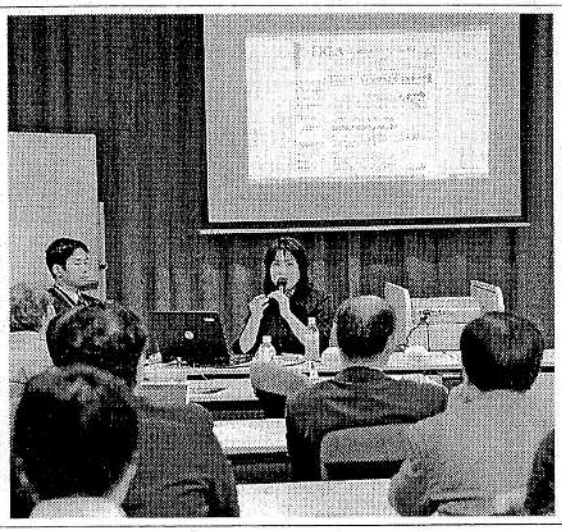
神戸大で研究会

神戸大学倫理創成研究会「ノン・アスベスト社会のために」が十四日、神戸大学人文学研究科学生ホール（神戸市灘区六甲台町）で開かれ、災害時の防じんマスク備蓄を推進する「マスクプロジェクト」など、子どもに対するアスベスト（石綿）の影響や対策について話し合われた。

学生ら約四十人が参加。一九九九年に東京都文京区の保育園で改修工事の石綿が飛散した問題で、当時一歳の長女を預けていた聖路加看護大学講師の長松康子さんが、子どもが石綿を吸い込む危険性について講演。「身の回りにある石綿に対して子どもは無防備。正しい知識を伝える必要がある」などと話した。

国連ハビタット親善大使のマリ・クリスティーヌさんが、阪神・淡路大震災や中越地震の被災地で子どもたちにマスクを配った経験を報告。中皮腫・じん肺・アスベストセンター（東京）の永倉冬史事務局長が、「マスクプロジェクト」の意義について説明し、予防教育の大切さを訴えた。

（増井哲夫）



子どもとアスベストの問題について語る長松康子さん＝14日午後、神戸市灘区六甲台町、神戸大学（撮影・内田世紀）